



5  
4512





4512

門 5  
號 4512  
卷

笈之小文序

風羅維坊 芭蕉菴 柳青少司

今此乃遠人なり其門葉日々  
茂り月々々々無かり門葉推して  
翁や年々此芭蕉菴ありてを  
知れり是は戸深川の庵室を因に  
持てし所なり此芭蕉菴と植を  
多し故に之を此菴と云ふなり

昭和十一年  
一月二十三日  
購求

23



口ふれ<sup>た</sup>時<sup>た</sup>す<sup>す</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>記<sup>記</sup>と<sup>と</sup>集<sup>集</sup>ん  
と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>笑<sup>笑</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ふ  
積<sup>積</sup>て<sup>て</sup>漸<sup>漸</sup>法<sup>法</sup>翰<sup>翰</sup>と<sup>と</sup>なる<sup>る</sup>を<sup>を</sup>夜<sup>夜</sup>を<sup>を</sup>を  
既<sup>既</sup>て<sup>て</sup>也<sup>也</sup>戯<sup>戯</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>月  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>して<sup>て</sup>い<sup>い</sup>四<sup>四</sup>十<sup>十</sup>四<sup>四</sup>百<sup>百</sup>韻<sup>韻</sup>の<sup>の</sup>色<sup>色</sup>を<sup>を</sup>學<sup>學</sup>  
爾<sup>爾</sup>來<sup>來</sup>に<sup>に</sup>葉<sup>葉</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>唯<sup>唯</sup>し<sup>し</sup>州  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>投<sup>投</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>む<sup>む</sup>し<sup>し</sup>初<sup>初</sup>を<sup>を</sup>群<sup>群</sup>衆<sup>衆</sup>  
と<sup>と</sup>共<sup>共</sup>に<sup>に</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>今<sup>今</sup>般

梓<sup>梓</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>世<sup>世</sup>傳<sup>傳</sup>と<sup>と</sup>廣<sup>廣</sup>め<sup>め</sup>せん  
と<sup>と</sup>欲<sup>欲</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>物<sup>物</sup>す<sup>す</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>儼<sup>儼</sup>に<sup>に</sup>病<sup>病</sup>ま<sup>ま</sup>  
遇<sup>遇</sup>て<sup>て</sup>息<sup>息</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>暫<sup>暫</sup>念<sup>念</sup>會<sup>會</sup>と<sup>と</sup>後<sup>後</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>

江州大津松本之隱士觀桂堂

破石子

宝永四丁亥年春乙州之因

懇求不得止深筆畢











神正月の物らさしうかひさし  
あつたはるはるの末のまじりて  
諸人とあつたはるのまじりて  
又山あふむと名くりて  
志城乃任名さしやまの地賜と  
けく其角さしあつたはるのまじりて  
りてなす

附之をよしのまじりて

けりてさしあつたはるのまじりて  
友親隣人あつたはるのまじりて  
まじりてあつたはるのまじりて  
志と入すあつたはるのまじりて  
かといふ紙布綿あつたはるのまじりて  
棚あつたはるのまじりて  
つとひてあつたはるのまじりて



ふんしあるの小船とてり別野子  
海にけし多庵子酒肴持りたり  
ての儀と紙しふふと持りみちを  
さるるを好しある人の首途する  
もも知らるるや持りしとて  
死れり

柳道の日記也りそのを紀氏  
長明阿佛の尼志文と婦人の情

とて書しそら餘を皆付知るよ  
ひふ其糟粕と改修りあることす  
海して浅智短才れ筆よ及く  
もあらずそ日る雨降るるるり  
晴るるるる相すがしこよ何と云川  
流れりりなりあるれりりり  
へくえぬれりもさるるを換新れ  
りりりりありすふさふさたまりれ



はれぬものいふはしめてはるるを  
山越のまゝのころ。まはれも目  
たはしの程もなかりけしきの後り  
さへもさしなすしりすれはれく  
やせんや書集のりそはれ  
者れはれりしりしりしり人の  
議言すしりしりしりしり人  
又元祖

早稲乃園のりしりしりしり  
飛舟舟雅をりしりしりしり  
強ひて都も遠くさるるしりしり  
たはれりしりしりしりしり  
強ひてりしりしりしりしり  
りしりしりしりしりしり  
りしりしりしりしりしり







有れ海のくくくくくくくくくく  
後さほいれくくくくくくくくく  
よちりりりりりりりりりりりり  
ちるおゆ

勢二つんけんくくくくく

熱田御仮寝

歴ちくくくくくくくくくく

甚た乃人よむむむむむむむ

きくくくくくくくくく

善根くすくくくくくくく

くくくくくく

たつたつたつたつたつたつた

くくくくくくくくくくく

あの人

あつあつあつあつあつあつあつ

けりるるるるるるるるるるる



こゝろひまわりて心合あるにお  
かへるゑもな

師老十の故にsingよおしめさる

よらんちか *resonance of hope*

庭舞しんみかおの  
*庭*

春のこころをわらわすはあはれ

日本の国にうらやまをたしめ

よるやいそがしうらやまを

花

あつたてをたしめよお

おほいこのあまのこをたしめ

あまのこをたしめ

白里や隣の庭よあまのこ

育れしそのあまのこをたしめ

酒のあまのこをたしめ

あまのこをたしめ



初春

まきまきやうけりよの野らふ  
植きややくけりよの一二す

伊賀乃國乃波の庄よりよあ後  
系上人の四指より儀峰山新大竺  
とやまうらうらき千歳れ飛んを  
かりくゆ藍ハ破れて礎とま  
坊人若き若く田畑とふみの新り

又よ乃も像の若れ縁壇で南へ  
のし観音と、まうまのれや也孫を聖人  
の由彩いする合おらうあしはる  
其代乃もあうらうよあく酒を  
計くるれき書柳子乃社なとを  
草薺の上は堆ッ疎林の枯らぬ  
松もまのあはるまよくとそんらぬれ  
又よ乃あをりよ信しふの上











藤の具多さハ乃とらりたうりとも  
 皆松捨つれともおの舞よもあまき  
 つ合節や乃お祝舞かこ茶の舞  
 ちんよあま包て指み寄る具し  
 さいやあまこカたのあまは  
 ちんよあまこカたのあまは  
 ちんよあまこカたのあまは  
 ちんよあまこカたのあまは

初歌

春のおやあまこカたのあまは  
 足張とく指み寄る具し  
 首飾り  
 ねみきりあまこカたのあまは  
 三輪 多の武家  
 脩治 多武峯ヨリ  
 龍門 越乃  
 雲雀のりあまこカたのあまは



龍門

新田のむねやよきれをきよせん  
酒のまねらんや故郷のむね

西河

かろくく山吹らるる故郷の春

蜻蛉川

布ぬの故郷は布ぬのまをり三十二  
山の奥に

はなせ田の川よま

ちか

大木のの故郷

善西の龍

後尾さへおらたま

榎

榎のりいさくや月くお里の里

日をたよきよこひやあな

扇を酒くひひやらる榎

昔清水

春ぬのいさくくははるの



よしの花はにりこきあつて入野を  
のぞきしむるにせむるはの  
ちのあはれなるもの物よみ  
てあはれあはれのかうあはれ  
あはれの枝おほむかひは  
是のこころあはれなる  
とあはれなるにせむるはの  
あはれなるにせむるはの

くさくさなるもの  
の

野

あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの  
あはれなるもの

あはれなるもの



跪ちやうれて西のふひくく  
のふくくくくくくくくくく  
まきくくくくくくくくくく  
侯の兵隊は遠征の初とらんある  
そ侯の兵隊の始とまひに借の人  
乃實とくくくくくくくくくく  
ねくくくくくくくくくくく  
や一寛歩歩くくくくくくく

井くくくくくくくくくくく  
まきくくくくくくくくくく  
あひくくくくくくくくくく  
ようくくくくくくくくくく  
りくくくくくくくくくく  
あひくくくくくくくくくく  
あひくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく



乃人もさき古の物付れなかりありあひ  
ともふむらうはらちのあつらん中し  
あや尾石のうらに玉と指ひ流すよ  
金とゆゑらん地してあよもすま付  
人よもかたらんやかりあそふも  
のひと付ちりや

衣更

一しぬひて後よ負ぬ衣の心

若れおへ布子書はしなかり 万箇

灌佛の目もたおるよあつらん中し  
若れらる麻のよと書はしなかり  
おのておしとるん

灌佛の目もたおるよあつらん中し

招提寺鑑真和尚末胡の付和  
中七十足るは難と志のよとるん  
此月乃らら場風吹入るあつらん中



育女の身はけりては縁をばおし

とて思ふはばめしおとけりて

四なるよとて思ふはばめし

廉の角はえりて思ふはばめし

大なるてあら人の思ふはば

杜の枝もも思ふはばめし

源平

月を思ふはばめし

月を思ふはばめし

卯月中はの光も思ふはばめし

とて思ふはばめし

わが思ふはばめし

はば思ふはばめし

思ふはばめし

思ふはばめし

思ふはばめし







羊腸險阻れを根よりのかた  
まのまぢ(い)のあまのい  
はし根はく(い)のあまのい  
し(い)のあまのい  
く(い)のあまのい  
い(い)のあまのい



ほし次消り方や  
次(い)のあまのい

明石夜泊

蛸壺を(い)のあまのい  
か(い)の権を(い)のあまのい  
ま(い)のあまのい  
し(い)のあまのい  
く(い)のあまのい







中烟をまてあつての御覽をた  
とぬおんまての御中よ投入  
供所をたぬてつうくけの餅が  
柳のむさつてたぬあまのたふや  
ちうてくす業のあつていけ  
ゆりまぬのまにさぬぬや  
翁名古屋に滞留の時有

更科記行幸西爰に次

7.

はしちし里あつての御覧を  
たぬおんまての御中よ投入  
供所をたぬてつうくけの餅が  
柳のむさつてたぬあまのたふや  
ちうてくす業のあつていけ  
ゆりまぬのまにさぬぬや  
翁名古屋に滞留の時有















あはれこころをさへらりしものしげぬ  
真のこころを捨てて危りしものを  
もよほしきなり

あはれこころを捨てて危りしものを  
捨てしものをさへらりしものしげぬ  
あはれこころを捨てて危りしものを  
もよほしきなり

侍や娘ひらきく月の夜  
あはれこころを捨てて危りしものを  
もよほしきなり

あはれこころ



文

月影也 田門 西家のみしつ

吹きすすふいあまのあま

此記行終て後し州以得た寂之文  
之語及上馬の賦集くは後なる  
頃惜く後集と加とるひ企ぬ

江南杖々菴し列梓之

宝永六年孟春慶且

京寺町二條下町

書林

井筒屋庄兵衛  
橋屋治兵衛板

二十七終

何海







伊藤家

家